

経済学部教授会と産業経済研究所について思うこと

大塩 武

1986年から87年にかけて1年間、在外研究の機会を得てハーバード大学のライシャワー日本研究所に籍を置いていたとき、ビジネススクールに滞在していた一橋大学商学部の廣本敏郎教授と面識を得ました。雑談中にそれぞれが所属する教授会の運営の仕方が話題になり、一橋大学商学部と明治学院大学経済学部のそれがあまりにもよく似ていることを知って驚きました。

私が明治学院大学経済学部商学科に専任講師として着任した1976年頃、経済学部は一橋大学関係者を中心にして創設されたという事情から、とりわけ商学科では教員の多くは一橋大学の出身者によって占められていました。このような経緯から経済学部教授会が一橋大学の教授会の運営の仕方を倣った可能性があります。

私が着任した頃から、経済学部教授会の構成員は平等に自由な発言が許されていました（教授に限られていた人事教授会の構成員が助教授以下の構成員にも広げられたのは1978年から79年にかけての頃と記憶しています）。自由な発言が許されると言うことは、会議の時間が長くなるということでもあります。記憶する最長の教授会は、阪柳学部長の頃だったでしょうか、朝10時に開始された入試合否審査教授会の後に定例教授会が続きました。議論は際限なく続き、終わったのが夜の10時過ぎでした。あの頃の経済学部教授会は、適当なところで妥協するような雰囲気は皆無で、議論のために時間が経過することに誰も気にしていないように見受けられました。中途退席者が目立ったという記憶はありません。

このような教授会の雰囲気をお伝えするのに最適な話があります。教授会冒頭におこなわれた「前回教授会の記録」の承認です。コピーされた手書の記録（案）がその場で初めて全員に配布され、記録の妥当性をチェックします。誤字の指摘から始まり、記録（案）の既述の訂正を求める発言が彼方此方からあり、正式な記録として承認されるまでには一時間近くの時間が費やされました。

あの頃の教授会は、今にしてみると、議論が自己目的化される傾向が無かったとは言えませんが、個人間の諍いが教授会に持ち込まれなかったわけではありませんでしたが、教授会の風通しは悪くありませんでした。一橋大学の教授会の運営の仕方と雰囲気は、長い歴史の中で明治学院大学のエートスに適合しながら、経済学部教授会のそれとして定着したのかもしれませんが（実証のない感想です）。本学経済学部の教授会の伝統が、その時々々に要請される合理性に促されて、今後更に育まれることを祈ります。

ところで、一般に、規模の大きな大学では、所属する学生の教育に関わる機能は学部単位で存在し維持されます。しかし、明治学院大学では、学生の教育に関わる機能は、学部教授会毎に集約されず、全学部の学生を対象とする教務部あるいは学生部という全学的な組織に委嘱されています。学生数が13,000名程度であれば、そのような形が合理的であるからです。

所属する学生の教育に関わる直接的な機能が教務部あるいは学生部として当該教授会から離れると、教授会とそのような部局を繋ぐ機能が必要になります。それだけではありません。そもそも研究と教育をマネジすることを課題とする教授会に即時的に発生する事務を処理する機能が必要です。実は、これらの機能が経済学部では産業経済研究所に与えられています。要するに、明治学院大学において、学部所属の研究所は、研究所と称しながら、実体は学部事務室の側面が非常に強いのです。今は皆無となりましたが、1980年代まで、学部単位で学部事務室を設置すべきとの議論が学部長会で浮上することを、教授会の学部長会報告として聞いたことが何度かあります。

1980年代まで産業経済研究所に限らず学部の研究所には大学から職員が派遣されていました。しかし、1990年頃までには各研究所から大学職員が引き揚げられ、産業経済研究所の場合、業務は助手と教学補佐だけに委ねられるようになりました。産業経済研究所助手として1979年に着任し、大学職員が引き揚げられてからの産業経済研究所において、経済学部教授会を支えた梅木郁子さんは、2017年度を以て定年を迎えます。産業経済研究所の歴史の区切りを実感します。